

冬夜書を讀む

菅茶山

雪は山堂を擁して樹影深し
擔鈴動かず夜沈沈

閑に乱帙を収めて疑義も思ふ
一穂の青燈万古の心

〔作者〕菅茶山（一七四八〜一八二七年）江戸時代後期の儒学者・名は晉帥（しんすい）、字は礼卿（れいけい）、通称を太仲

（たいちゆう）と称し茶山（ちやざん）さざんともいうは号。寛延（かんえん）元年、備後神辺（びんご）かんなへ、今の広島県深安（ふかやす）郡に生まれる。京都に遊学し、のち故郷神辺に塾を開き廉塾（れんじゆく）といい、住居を黄葉夕陽村舎（こうようせきやうそんしゃ）と名づける。詩名高く子弟多し。文政十年八月八十歳にて没す。著書に黄葉夕陽村舎詩前後編その他多数ある。

〔語釈〕*山堂：山の中の住まい。 *擁：とりかこんで、埋めて。 *樹影深：木々の姿が一層深く感じられる

*檐 鈴：軒につるした風鈴。 *沈 沈：夜の更けゆくさま、静かなさま。 *亂 帙：取り散らかした書物、

帙は書物を包む覆い袋。 *疑 義：うたがわしい意味。 *一 穂：一つのともし火（形が稲穂の先に似ているのでいふ）

〔通釈〕雪が山中の家をうずめ、樹木も雪に深く掩われている。風もやみ軒の風鈴も動かず、夜は沈々とふけてゆく。

静かにとり散らかした書物を整理しながら、疑問の箇所を考えつつづけていると、稲穂のような青白い灯火が、大昔の聖賢の心を照らし出してくれるように思われてくる。